



各々がテキストを読み、教師に質問するという時間も用意されているものの、基本はディベート形式。休み時間には、教師に疑問をぶつける生徒の姿も

フランス人の生徒と一緒に 哲学の授業を受けてみた！

フランスの公立学校と同じカリキュラムで授業を行う「東京国際フランス学園」。いったいどんな哲学の授業が行われているのだろう。

Text by COURRIER Japon Photographs by Masataka Namezu / COURRIER Japon

バ カロレアまであと2ヵ月と迫った4月初旬。フランスの新学期にあたる9月から、すでに半年以上も哲学の授業を受講している生徒に交じり、授業に参加してみた。午前10時スタートで、10分の休憩をはさみ、正午まで。凝り固まっていた思考が解放されていくのを感じる2時間となった。

この日のテーマは「自由について」。前週の続きとはいえ、哲学の教師パスカル・リッテール(39)の「人間には、『選択』という自由意志がある。だがそれは本当に自由と言えるか」という問いかけに、早くも気後れする。だが、教師が挙げた具体例には、思わず前のめりになった。

「たとえば今週の金曜日、16時に授業が終わるとする。選択肢は二つ。さっさと家に帰り部屋にこもり、復習をするか。もしくは、外食に出かけるか。ここには、どちらかを『選択する』という自由があるように思える。だが、『性格』や『体質』『受けてきた教育』といったものを考えると、答えは予見できるのではないか。自由なつ

もりでいても、それは本当に自由と言えるか——」

自分の身に置き換えて考えやすい例だったため、一気に興味が湧く。それは生徒たちも同じだったようで、一人の生徒が、「どちらかしか選択できないというわけではない。家に帰ってから、考えが変わり、外食に行こう、というときだってある」と、すぐに意見を述べた。その答えに、また別の生徒も反応する。

「もし神と一緒に映画館に行ったら……」

教師も生徒の意見を聞きながら、次のステップへと話を進め、そこからまた新たな議論が生まれた。その後、教師が投げかけた問いも、じつに興味深いものだった。

「右手か左手、5秒後にどちらかの手を挙げて下さい」

指名された生徒は、少し考えた後、左手を挙げる。

「右手を挙げることもできたが、左手を選んだ。これこそ(フランスの神学者)ボシュエの言う『自由』です」

この問いに対して、「右利きか左利きかでは条件が違う」など、生徒たちから素朴な意見が飛び交う。彼らの意見に対し、教師も「いい気づきだね、でもボシュエは……」と続ける。哲学者の名前も、彼らの思想も、具体例とセットになっているので、自然と頭に入ってくる。

スピノザ、デカルト、サルトル——。2時間の授業でとったメモやプリントを見返すと、それなりに哲学者の名前は出てきているが、小難しい話をされた、という印象はまったくない。とはいえ、20歳にも満たない生徒が「私たちの行動はすべて神の御業ですか?」と、教師に意見したときは、のけ反るしかなかったが……。

ちなみに、この日生徒たちが一番盛り上がったテーマは、「もし神と一緒に映画館に行ったら、神は完璧なセレクトをしてくれるだろうか?」というもの。生徒たちの倍の年月を生きているにもかかわらず、私はまだこの「答え」を見つけれずにいる。



フランスの生徒は、ノートをとるのも基本は万年筆。ポイントを押さえた「読みやすいメモ」が基本だ

「自

由とは、何ひとつ障害のないことか?」「不可能なことを望むのは、愚かなことなのか?」

バカロレア(大学入学資格を得るための全国統一国家試験)に臨むフランスの生徒は、否が応でもこの種の問題と対峙しなければならぬ。

フランスでは高校3年の時点で、哲学が必修科目となる。本人の興味云々を抜きにして、文科系の生徒は週8時間、経済・社会学系の生徒は週4時間、理科系は3時間、技能系は2時間の受講が義務付けられているのだ。そして、その1年の成果がバカロレアの試験で問われることになる。

問題文は、たったの一行。それを4時間かけ、ひたすら解く。それだけに哲学の試験は受験生が最も恐れる試験であり、「試験中の試験」とも呼ばれている。

それにしても、なぜフランスでは哲学が「試験の代名詞」となっているのか。大学入学資格の試験科目にまでなっているのは、他の欧州諸国を見渡しても、この国ぐらいいだ。

フランスでは、哲学が「人間の存在にかかわる学問」として捉えられている。フランス人たるもの一生に一度は、たとえそれが数時間の試験だったとしても、哲学の問題を解

文系も理系も必修科目

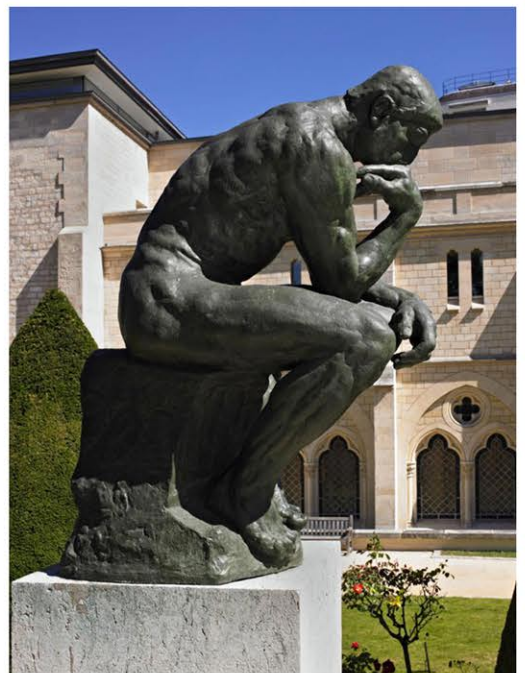
フランスで最も重視される教養、それは「哲学」です。

「フランス人は、やたら理屈っぽい」と言われる所以は、哲学教育にあり!? フランスにおける哲学教育の歴史を辿っていくと、ナポレオンの時代まで遡ることに――。

from Slate.fr スレート・フランス ■ FRANCE Text by Annabelle Laurent

かねばならない。哲学を学ぶことなくして、大人の仲間入りなどできない――これがフランスにおける哲学のありかただ。

高校の必修科目として、哲学を学ぶ国は、欧州ではフランス以外に、イタリアやスペイン、ポルトガルなど



がある。だが、その授業内容はフランスとは大きく異なっている。

哲学が人を自由にする

たとえばイタリアの哲学の授業は3年間にまたがって行っているものの、「思想史」と題された科目のなかで、歴史の教師が哲学史を断片的に教えるに留まる。またスペインでは、純粋な哲学の授業はなく、高校1年で「公民教育」を、高校2年で「哲学史」を教わるだけだ。

ドイツやスイス、ポーランドやスウェーデンでは、哲学の授業は選択科目に過ぎない。政教分離がフラン

スほど明確でないドイツでは、国と教会のあいだに強い協力関係があり、州によって違いこそあるものの、生徒は14歳の時点で「宗教」か「哲学」の授業のどちらかを選択することになっている。

一方、英国の中等教育には、哲学の授業と呼べるようなものはそもそも存在しない。英国とドイツにも、ヒュームやカント、ヘーゲルといった偉大な哲学者が存在したことを考えると、これらの国では哲学がフランスのように重要視されていないことは驚きに値するかもしれない。では、フランスが哲学を重要視する理由はどこにあるのか。

バカロレアの「哲学」の試験をのぞいてみよう！

毎年6月に行われるバカロレア。1970年以來、生徒たちが試験初日、最初に受ける科目が、哲学だ。その年にどんな問題が出題されたかは、一般のフランス人も興味を持つテーマで、新聞やテレビのニュース番組でも取り上げられるほど。問題は専攻によって異なるが、生徒たちは3つの問題から1つを選択し、4時間かけて小論文形式で答えを出す。

たとえば、昨年出題された問題は次の通り。

文科系

「働くことで、我々が得ているものは何か？」
「すべての信仰は理性に反するものか？」
「スピノザの『神学・政治論』の抜粋について論ぜよ」

理科系

「国家がなければ、もっと自由になれるのか？」
「我々には真実を探る義務があるのか？」
「ジャン=ジャック・ルソーの『エミール』の抜粋について論ぜよ」

いったいどのように答えるのが「正解」なのだろう。たとえば、「働くことで、我々が得ているものは何か？」という問題に対する答えかたとして、学生向け雑誌「レテュディアン」は、「働く」という言葉を次の3つに置き換える方法を解答例として挙げる。

- 生計を立てる
- 経済活動に参加することで、社会に居場所ができる
- 社会的価値観を形成する「一員」になれる

つまり、「仕事をしているからこそ、人は社会に対して意見を言える」「自由を得ることができる」といった解答が、この問題の模範解答となる。その上で、ニーチェやマルクスら哲学者の思想を盛り込みながら持論を展開するのが、高得点を取るポイントとなるのだ。

レクスプレス(フランス)ほか

第一に挙げられるのは、フランスの歴史の特殊性だ。18世紀の欧州で主流となっていた啓蒙思想(理性による思考の普遍性を主張する思想)は、フランス革命及びその後の国家の成立に多大な影響を及ぼした。その流れを受け、1808年、ナポレオンは、「理性的な思考ができる市民」を養成する目的で哲学の試験を設けた。

哲学を深く学ぶことで、人はより自由な思考ができるようになり、また自由な思考こそが人間をより自由存在にする。とナポレオンは考えた。つまり、こうした哲学教育こそ、理想のフランスを築き上げる

ることに大きく貢献すると考えられていたのだ。以来、第二帝政時代の1852〜1863年をのぞき、哲学は高校での必修科目であり続けられている。

学びのは「哲学」(philosophie)

国民教育省の監督官を務めるマルク・シエリンガンは、こうした国の独自性に加え、次の2つの要素がフランスの哲学教育をより独特なものにしていると話す。

一つは、個人の思考を育成するという哲学教育の目的は、生徒だけでなく、教師にも当てはまる、という

こと。つまり、教師も生徒とともに成長していく、という考えかただ。そしてもう一つは、歴史的視点や哲学的観点だけで哲学の授業を進めてはいけない、という基本姿勢が教師にすり込まれていることだ。

哲学の教師は、上から目線で生徒に接してはならず、「思考と判断に基づき理路整然とした自己表現が身に付くよう、生徒を補助する役割を担わなければならない」と国民教育省によって厳密に定義されている。

「高校の最終学年で学ぶのは哲学ではなく、哲学することだ」と、フランスの哲学の教師が繰り返し口にするのもそのためだ。

こうした背景を考えると、フランス人がやたら批判精神に溢れているのも、巷で起こった些細な事件を必要以上に、知的に解説したがるのも、哲学教育の影響を受けているからだ、と他国の人々が皮肉まじりに言いたくなる気持ちもわからなくはない。

高校で哲学が必修だからといって、大学でも哲学が人気かといったら、そう単純な話ではない。だが、「哲学カフェ」や「哲学雑誌」なるものが存在し、それらが常に人々の関心を集めているという事実は、フランスの哲学教育と無縁ではないはずだ。